



玉苗が植えられた田んぼに映る民家や屋敷林・・・この時期の米どころならではの景色です。暮色が濃くなりやがて夜の帳が下りると、蛙の鳴き声がそこかしこから聞こえてきます。季節の匂いと音が景色と共に人々の脳裏に刻まれていきました。この記憶の遺伝子を何とか次世代にも伝えたいところです。

似て非なる 2つの中村家住宅

「親戚同士なのですか?」と、旧東方村(レイクタウン)と大間野にある2つの中村家住宅について尋ねられることがあります。市域には中村姓の旧家がいくつかあります。中には遠い親戚筋の方もおられるようです。また、江戸期には村の名主を務めた家や町の中心的な家だったりした中村家もあります。

市で管理運営している2つの中村家住宅が再開しましたので、今回は双方の中村家を改めて知っていただきたいと思います。

名称 所在地	旧東方村中村家住宅(市指定文化財) 越谷市レイクタウン9-51 (TEL:048-986-7051)	大間野町旧中村家住宅(市保存民家) 越谷市大間野町1-100-4 (TEL:048-985-9750)
中村氏の出自	当家に残されている家譜によれば、ご先祖は平姓の千葉氏別家の流れをくむ家柄です。戦国期には太田道灌の家臣でもありましたが、その後農民となって土地を開発したと伝えられています。	口伝によれば、戦国期には豊臣方の小西行長の家臣でしたが、関ヶ原合戦後に当地に移り、先祖の菩提を弔うために寺院を建立し、以後は当地で農民として土地開発をしたと伝えられています。
江戸時代の様子	代々旧東方村下組(現在の大成町)の名主として幕藩体制の最末端の行政を担う仕事を務めました。(東方村には上組と下組の二人の名主がいました。)江戸初期の幕府の検地では役人を案内したり宿泊させたと記録されています。その後、元禄期に当村は忍藩領となりました。江戸中期、一時没落しかけてましたが、必死の取り組みで土地や家を取り戻し、再び名主の役に就いて明治期を迎えました。	江戸期前半の元禄期に槐戸新田(現在の出羽地区)から分村して大間野村となりました。中村家は分村に関わる作業にも携わったことでしょう。その後も当主は代々四郎兵衛を名乗り、名主など村の中心的な役割を務めてきました。当に残る漆器には「四」の文字が書かれています。ご先祖が眠る菩提寺墓所には代々の墓石が立ち並んでいます。天保から大正期の当主・賢之輔の大きな墓石の背面には顕彰の文が刻まれています。
明治期の様子 幕末から	この時期の当主・義徳(重貞、義章)は八潮の小澤家から養子に入った人で、幼少期から漢籍などをよく学んだ人でした。名主を務める傍ら学問も続け、幕末には培根という号で私塾を開きました。明治になって教育の近代化が進められると、近隣の私塾も合わせて学校を作りました。それは今の市立大相模小学校の母体です。	賢之輔の妻は川口の旧家のお出で、若い時に江戸の旗本の家に行儀見習いに行っていたそうです。それが縁で、戊辰戦争で上野彰義隊士が当家に逃れて来て、一時土蔵にかくまったそうです。明治になると賢之輔は越ヶ谷周辺の副戸長を務め、後には埼玉県議会議員として活動しました。
住宅の特徴	当住宅の主要な部材は安永元年(1772年)に建築された時のもので、越谷市最古の住宅とされています。間取りなど、江戸中期の名主の家の様子をよく伝えています。またその後、時代や家族構成に応じて適宜リフォームされた跡が確認されます。江戸期の屋敷図には複数の蔵が描かれています。	主屋の他に長屋門、土蔵、石蔵など、旧家の施設がよく残っています。主屋は100年あまり前の完成ですが、江戸期にも似たような間取りではなかったかと思われます。奥座敷の書院造はとても立派なものです。寄贈前まで蔵は3つありましたが、一番古い江戸期の蔵は今はありません。
【共通】接待空間と居住空間の区別のある間取りです。前者は名主という行政の末端役を務めたことに関りがあります。後者の内、土間は生産(農作業)の場でもありました。		

門の特徴

大間野

東方



主柱

このタイプの門を「**薬医門**」といいます。医者の子の家の門だったからとか、元は武家の門で「矢を食う＝矢を防ぐ」門だったからなどの説があります。特徴は主柱が屋根の前方寄りにあることです。

今はない西蔵
ここに彰義隊士
がかくまわれた。

寄贈前の大間野・中村家長屋門



このタイプの門を「**長屋門**」といいます。元々は武家屋敷の門で、屋敷の出入口をチェックする門番などが起居する部屋がついています。明治になって身分制度が変わってから、一般の家にも付属させられるようになりました。

主屋屋根の特徴

東方



従来の屋根は厚さ 60 cm に茅を葺いたものでした。全部を葺き替えるのは数十年に一度ですが、部分的な葺き替えは時々行いました。瓦根溜井には共同の茅場がありました。主屋屋根は**五つの棟**（屋根の峰の部分）で構成されています。式台付玄関の屋根は**入母屋造**です。

大間野



江戸期の建物は記録がありません。明治期から昭和初期にかけて順次建てられた建物のうち、主屋屋根は 100 年あまり前の姿を参考に、現代の職人が腕を振るったものです。この一番高い所の棟は、「**青海波**」というデザインです。また、**寄棟造**の大屋根に、式台付玄関の**入母屋造**を組み合わせています。

綿を栽培しています

両中村家住宅では今年も綿を栽培しています。この種は昨年採れた綿花の種です。今年で 3 代目になります。盛夏に花を開き、花が終わるとそこに実がなり、10 月ころにはその実が割れて綿毛が出てきます。ご来館の際は、ぜひご覧ください。

市域の東側の村々ではかつて綿を栽培して近隣に出荷していました。明治初期、見田方村からは 3000 kg 以上の綿を出荷した記録があります。

